

## 世界に羽ばたけ！ 米山学友⑬

# ニッポンの自然と共に生きる

自然観察会で、参加者たちに語るケビンさん



「ホラ見て。セミは暴れるから怖いと感じるけど、何もしないヨ」。ケビンさんがセミを捕まえてみせると、子どもたちは目を輝かせて手を伸ばしました。

千葉県印西市に住んで25年。里山研究者・自然史ライターとして活躍するケビン・ショートさんは、環境教育のために各地で自然観察会や講演会を開き、生き物の調査研究をし、森づくりの提言なども行っています。

### 陸軍兵士として来日

1949年、アメリカ・ニューヨーク生まれ。中学生の時、自然豊かな郊外へ引っ越し、学校ではポケットにしのばせたヘビや虫を女の子に見せて悲鳴をあげさせ、授業中は落書きに夢中になるという、やんちゃ坊主でした。

ベトナム戦争が始まり、当時のアメリカでは大学生を中心とした反戦運動と同時に、自然保護・環境保護の一大ムーブメントが起こりました。「ヒッピー」を自認していたケビンさんは、このころから「人間と自然との関係に関心を持ちはじめた」と言います。欠席続きだった大学はやがて退学となり、72年、徴兵による陸軍兵士として日本の神奈川県・座間駐屯地にやってきました。

生まれて初めて体験する異文化、言葉も考え方も異なる国・ニッポンは刺激的で、軍務の傍ら上智大学に通い、日本語や歴史を夢中で学びました。特に魅了されたのは切り立つ山の美しさ。休暇になると、丹沢山系や八ヶ岳、

北アルプスの山々を登り、シュラフとテントを積んだバイクで日本中を旅して回りました。

「日本は工場ばかりの国だと思ってきたけど、豊かな自然があり、その近くに住む人々には独特のおおらかさがある」。除隊後、「自然」と「人間」を学術的に研究しようと、アラスカ大学の修士課程で人類学を学び、文部省（現・文部科学省）の国費奨学金を得て79年、再び来日しました。

### 北海道の漁村での暮らし

研究テーマは「漁村」。北海道小樽市にあるしめくつ祝津という小さな漁村に空き家を借り、漁民と生活を共にしながら研究の日々を過ごしました。

ある日、ウニ漁に同行した時、熟練した漁師ほど、捕獲の容易なムラサキウニの漁獲量が少ないことに気づきました。「ウニは見つけているはずなのに、1個でも多くとれば収入になるのに、なぜ?」。その理由は、このウニを半人前、あるいは視力が弱った高齢の漁師に譲っていたのです。自分の利益だけを追わず、助け合って生きる漁師たちの姿に、ケビンさんは心打たれました。実態調査のほか、進水式の儀式や漁業に関する法律や制度、政策など、研究は2年半に及びました。

米山記念奨学生に合格したのは、国費奨学金の期間が終わり、「あと少しで論文が完成するのに」と思っていた時でした。ほどなくスタンフォード大学大学院博士課程への進学が決まったため、奨学期間は5か月ほど。世話クラブの小樽ロータリークラブ（RC）での評価は高く、カウンセラーの故・北村正司会員も「再び来日する時は米山記念奨学金での支援を希望してやまない」と記すほどでしたが、帰国後は連絡の機会もなく、「消息不明」となっていました。

ところが今年2月。第2820地区（茨城県）第7分区インターシティミーティング（IM）の打ち合わせの際、牛久RCの中川城子会員は、講演者から「実はボク、昔、米山記念奨学生だったんですよ」と言われ仰天。同地区では水保全に力を入れており、IMでは東京情報大

“ヒッピー”を自認するアメリカ人青年がベトナム戦争で徴兵され、日本にやってきました。それまで特にやりたいこともなかった青年の心を動かしたのは、日本の美しい自然でした。日本人以上に日本の文化や歴史、神話に精通し、自然の豊かさを愛する米山学友のケビン・ショートさん。米山記念奨学生としての期間はわずかでしたが、彼の研究の糸を紡ぐひとすじとなったことは間違いありません。



よねやまだより

学環境情報学科教授を務めるケビンさんから「人と自然との共生」と題する講演が予定されていたのです。

「主人と長い付き合いのあるケビンさんが、まさか米山記念奨学生だったとは……」と中川会員。消えかけていたロータリーとの糸が再びつながった瞬間でした。

### 周りに気がつかない子どもたち

近年、ケビンさんは子どもたちの様子に危機感を抱いています。大学での講義中、映像を見せようと窓の暗幕を閉め始めても、手伝う学生はいません。「自分のこと以外は、何も気がつかない子が多くなった」と、感じています。

「子どもたちはゲームや携帯など端末の世界に夢中で、『寄り道』や『探検ごっこ』をしなくなりました。人間は本来、そういう体験を通して肉体的、心理的に発達します。今の子どもは確かに勉強はできますが、自分の周りに何が起きているかを見て、分析して、それに基づいて行動する力がすごく欠けていると思います」。世界中、同じような傾向にあります。日本では特にそれが強い、とケビンさんは指摘します。

「ボクにできるのは講演会で親や社会に問題を提起したり、観察会で子どもに自然を体験してもらい、自分で何かを発見する感動を味わってもらうこと。最近、里山を守ろうと動き出す自治体が増えてきました。そんな時、少しでも貢献できたかな、と思います」

### プロフィール



#### ケビン・ショート さん

(1982年4～8月 / 小樽RC)  
アメリカ出身。1972年、ベトナム戦争の徴兵をきっかけに初来日。以降、学術研究を目的に数度の来日を経て、現在は千葉県印西市在住。環境教育コンサルタント、自然史ライターとして活躍。東京情報大学環境情報学科教授。著書に『ケビンの里山自然観察記』(講談社)他。

3月11日、東日本大震災では、愛する日本の自然と漁師町が津波にのみ込まれる映像を、なすすべもなく見つめていました。「それでも人間は、自然と切り離して生きることはできない」と、ケビンさん。人間がいかに自然と共存していくべきかが、ますます問われています。これからも、日本のすばらしさを国内外へ発信し、美しい自然を守っていく——。それが、彼のライフワークです。

#### ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見を、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL: 03-3434-8681 FAX: 03-3578-8281  
Eメール: mail@rotary-yoneyama.or.jp

### 各国学友から届く震災へのお見舞いと支援の輪

このたびの東日本大震災により被害に遭われた皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。甚大な被害を伝えるニュースは世界中に配信され、震災直後から世界各地の米山学友による震災見舞いのメッセージが続々と寄せられました。また、台湾、韓国、中国の海外学友会をはじめ、第2760地区、第2780地区、第2650地区、第2670地区、など各地区学友会が義援金を集めて寄付してくれたほか、職場で募金を推進したり、個人で寄付をするなど、米山学友による支援の輪が広がっています。「いろいろな国が大変な時に必ず最初に手を差し伸べてくれるのは日本です。今度はこちらがお返しする番です」。「大災害時、日本人のように人を気遣い、協力し合って対応できるのは大変難しいことです。元奨学生として、あらためて日本人を見て感動しています」。米山記念奨学会では、被災地の一日も早い復興を願い、学友からのメッセージや義援金の報告を、ホームページ (<http://www.rotary-yoneyama.or.jp/>) を通じてお知らせしてまいります。